



# 蘇る一瞬 みとよ写真帳 page 18

このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。



**懐かしの1枚**  
ギオン通りと  
駅前通りの交差点  
昭和40年代・高瀬町

ギオン通りは、かつてから詫間と琴平を結ぶ要路で、多くの商店が立ち並んでいた。大正2(1913)年に上高瀬駅が開業すると、ギオン通りと上高瀬駅を結ぶように線路に平行して商店が立ち並ぶようになった。かつては、この両通りの交差点に百十四銀行高瀬支店や高瀬農業協同組合上高瀬支所などがあった。

## 「思い出のページ」

110年前に創業された菓子屋から、この場所の移り変わりを見てきた2代目店主清水加壽男さん(81)に当時の話を聞きました。

「私が23歳で結婚し、この菓子屋に来たときは、このあたりは高瀬の銀座。銀行が6行もありました。記念硬貨が人気だった頃は皆が何時間も待つて行列に並び、品切れになればまた別の銀行にはしごして並んでいた姿を覚えています。店の裏を通る機関車は石炭で走るので、煤煙でトイが腐ってしまっていましたね。うちの横には踏み切りの警守の家があり、機関車の通る時間に合わせて手で遮断機を上げたり下げたりしていました。

私は16歳から和菓子の修行を、四国の方々でしましたが時代は終戦直後。物もなく、みんな生きることに必死でした。この親方も材料集めだけで忙しく、一遍聞いたことは二遍は教えてくれませんでしたね。皆自分で、じつと見て技を盗んでいましたよ。親方の前でメモなんかした

ら「頭に書いとけ」と叱られるので、トイレに隠れてメモをしていました。いつもトイレが混んでいましたよ(笑)。この店に来て58年。どんなときでもお客さんの『美味しかった』の一言が一番嬉しい言葉。職人冥利に尽きるというものです。それはずっと変わりませんね」



**今** となつてはどうしようもないけれど未だ整理できない思い、頭では言えないと分かっているけれども伝えたい気持ち、漂流郵便局にはたくさん寄せられていました。手紙を「書く」ために「考える」ことは、生きていく中でついた心のかせを軽くし、また前向きに生きていく後押しをしていくようにです。いいとか悪いとかではなく、ただ静かにその気持ちを受け止めてくれる、中田漂流郵便局長や栗島の懐の深さが、漂流郵便局をより引き立たせていると感じました。